

幼児期におけるイマジナリーコンパニオン（IC）の
働きについての検討

大 里 優里奈

要旨

幼児期の子どもによく見られる現象に、イマジナリーコンパニオン (Imaginary Companions : IC) がある。IC は名前を持ち、数ヶ月間継続して、ある種のリアリティを伴って子どもが相互作用する目に見えない存在であると定義されている (Svendsen, 1934)。日本においては“空想の友達”“想像上の仲間”と呼ばれており、実体を持ち目に見えるタイプ (Personified Object : PO) と、実体を持たず目に見えないタイプ (Imaginary Friend : IF) がある。IC を持つ子どもが社会的認知能力を高めることが明らかになっているものの、情動にどのような働きがあるのかについて明確な検討はされていない。本研究では、実体を持ち目に見えるタイプ (PO) を持つ子どもが、目に見えないタイプ (IF) を持つ子どもよりも多かったことから、PO を持つ子どもと持たない子どもとの間で、困難な状況に IC がいることでどのような行動が見られるかを明らかにし、IC の働きを検討した。

子どもの IC への発話や接触行動を検討した結果、IC には4つの働きがあると推測できた。第一に、IC を持つ子どもは、責任感や重圧を抱いている長子が多かったことから、日常で感じている感情や環境を解放する働きがあると考えられる。第二に、不安場面において IC に話しかける行動から、気持ちを落ち着かせる働きがあると考えられる。第三に、普段から IC を持つ子どもにとって実験で用いた IC は、モノではなく、生きている IC として機能し、不安な状況を共に過ごす仲間として、触り続けなくてもその場に IC がいることで不安を沈める働きがあると考えられる。第四に、普段から IC を持つ子どもの中でも、緊張が高い子どもの接触行動には叩く、振る、抓る、押しつぶす、引っ張るなど、攻撃的な行動が見られ、自分の不安や不快な感情をぶつけて発散する働きがあると考えられる。これらのことから、IC には社会的認知能力を高めるといった能力の側面、寂しさを紛らわすだけでなく、自分の情動を発話や接触行動により落ち着かせ、発散する働きがあることが示唆された。